

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第536号 平成25年4月30日

## 偽りなき者

「偽りなき者」は、デンマークの田舎町を舞台にした映画です。

この映画は、子どものたわいない嘘がきっかけで、町中の人々から変質者の烙印を押され、様々な嫌がらせを受けるようになった主人公が、自らの誇りと尊厳を守る為に戦うというものです。

見終わった後の後味の悪さは、何ともいいようがありません。これは、この作品の出来が悪いというわけではありません。むしろ、人間の本質を暴くという意味で秀逸だとは思いますが、全く泥沼の、奥深い心の闇を覗く様で、胸苦しさを覚えます。

映画の主人公ルーカスは、妻と離婚し、今は幼稚園の教師として穏やかな日常を送っています。しかしある日、親友テオの娘クララがルーカスから性的いたずらを受けたという作り話を園長に話をしたところから、町の住民を巻き込んだ問題へと発展して行きます。

園長はじめ町の住民たちは、幼いクララの証言を信じて疑いません。一方、無実を証明できる手立てのないルーカスの言葉に、耳を貸す者はおらず、仕事も親友も、何もかも失ったルーカスは次第に孤立して行きます。しかも、家に石が投げ込まれたり、愛犬が惨殺されるという様に、彼に向けられる憎悪と敵意は次第にエスカレートして行きます。

こうした中、ルーカスは無実の人間の誇りを失わないために、ひたすら耐え続けるのですが、出口は見つかりません。むしろ、出口は無いといった方が良いでしょう。

何故こういう事になったのか。それはクララが、かまってくれない両親に代わり優しく面倒を見てくれるルーカスの気を引くためについたたわいのない嘘が始まりでした。

「子どもは嘘をつかない」という不思議な思い込みが、全体を支配しています。事実関係を確認する為調査員がクララから事情を聴くのですが、これが明らかに誘導的であるにもかかわらず、その事に周りの大人達は気づこうともしません。しかも、後でクララがあれば嘘だったといっても、一度作られた確信は、真実となり、誰もクララの心の内を見ようとしません。クララもまた、自分のついた嘘によって孤立して行くのです。

この様にして罪が作られていくとしたら、恐ろしい事です。しかし、現実を見ると、こうした冤罪事件は後を絶ちません。いつ自分が当事者になるとも限らないのです。

平成17年にJR横浜線の車内で起こった痴漢事件も、考えさせられる事件の一つです。

車内で女性に痴漢をしたとして一人の男性が逮捕・起訴されという、良く聞く話ではありますが、この事件では、被疑者の男性は、一貫して無罪を主張し続けますが、裁判では懲役1年6ヵ月の有罪判決が出されてしまいます。

この事件については「それでもボクはやってない」という形で映画されているのですが、こうした事件は、無実の証明が非常に難しく、その分冤罪が起こり易いともいえます。

客席の側においてルーカスが無実だと知っている私は、町の住民の行動に対して、それが行き過ぎだし酷いと思うのですが、一方では、JR横浜線での痴漢事件については、それが冤罪事件だったのかどうか分からないという自分がここにいます。この「分からなさ」は、結局与えられた情報の中でしかものを考えられず、しかも、その情報の真偽を確かめる術がないと事に起因しますが、実は、そこに本当の怖さがあるのだと思っています。

もしこの映画に救いがあるとしたら、それは、人としての誇りや尊厳を守る為には、時に孤独な戦いをすべきであり、また、そうするだけの価値があるという事を感じさせてくれた事でしょうか。(塾頭：吉田 洋一)